

意味と発話行為と言語ゲーム

金 井 満

0. はじめに

1998年3月に発行された『ドイツ学研究』39号において、「発話行為と行為」というタイトルで、発話行為論において「行為」とはそもそもどのように定義されうるのかが明確にされていないのではないかという問題点が浮かび上がってきた。そこで近年行為論研究においていくつかの論文を発表してきているデヴィッドソン (D. Davidson)¹⁾の理論を中心に「行為」とは何かを探り出そうという試みを行った。しかしながらデヴィッドソンにおいても行為の定義付けははっきりとはしていなかった。その後『ドイツ学研究』45号にて、フォン・ウリクト (Georg Henrik von Wright)²⁾の行為論理学の観点からも同様の模索を行ったが、ここにおいてもはっきりとした解答が得られないままになってしまった。その後の試みにおいても行為概念を明確にすることはできていないが、これと並行して、この行為はどのように記述されうるのかや、行為を記述する際に問題となるような命題態度³⁾や志向性などの行為と関連すると思われる分野からも行為を考察することによって、行為の本質を見極めようと模索してきた。

上記のようなテーマを掲げてきた背景は、修士論文以来取り組んできた「発

1) アメリカの哲学者。論理実証主義とプラグマティズムによるその批判を継承する言語哲学者。

2) フィンランド生まれ。ケンブリッジ大学でヴァイトゲンシュタインに師事。論理実証主義者、分析哲学者。

3) 信じるや知るなどの動詞で表される心的態度。

話行為論」⁴⁾において、行為という概念が果たす役割とはいったいいかなるものであり、それが人間の言語活動にどのような影響を及ぼすものなのかを明らかにしてみたいという動機に基づいている。発話行為論 (Sprechakttheorie) の創始者であるオースティン (J. L. Austin) ⁵⁾は、ある文を述べることは行為の遂行そのものであるか、あるいはその遂行の一部分をなすことであり、この行為が何かを言うことだけとして扱われることは考えられない⁶⁾と述べている。発話行為ももちろん行為であるが、発話することによって発話行為以外の行為が行われることもある。このように言語行為 (Sprechhandlung) において複合的な役割を果たす行為という概念は、広範囲に多種多様な影響を及ぼすものではないだろうかと思われた。今回 2008 年度の長期研究休暇を取得できたのを機会に、1 年間という期間を有効に利用し、今一度原点に立ち返り、過去の経過を整理して見たいと思う。それを踏まえた上で、可能であるならばこれまでに扱ってきた分野から少し範囲を広げてさらに多様な観点から行為および行為論を再考し、今後の方向性の確認を行ってみたいと思う。

まずは簡単に 1998 年以降の概観を行った上で、長期研究休暇中に新たに浮かび上がってきた観点からの考察を進めていきたいと思う。

1. 行為の定義と行為論

通常、行為概念は刑法など法律の分野において扱われることが多い。また哲学の分野でも、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』⁷⁾において行為分析が行なわれているが、この論文中で扱われるのは、発話行為という枠内における行為に限定されている。

4) オースティンは、発語行為、発語内行為、発語媒介行為として区別し、言語表現がもつ発話内行為を引き起こす力を指して発語内力と呼んだ。

5) オックスフォード日常言語学派の中心。言語行為論の創始者。

6) 『言語と行為』S.4

7) アリストテレスによる哲学史上はじめての倫理学書

前述したように、1998年の「発話行為と行為」において、発話行為論の創始者であるオースティン、オースティンに続くサール (J. R. Seale)⁸⁾が行為を明確に定義していないのではないかという観点から、彼らに続く発話行為論および行為論研究者の中から数人の理論の分析を行ってみた。結果を簡単にまとめてみると、ヘルマン (T. Herrmann) は、行為を「出来事 (Ereignis)」と捉え、この「出来事」は、これに関与する主体の観察可能な身体的な動きとして理解できる場合にのみ行為として記述される⁹⁾と定義している。しかしながら、ヘルマン自身はこの定義を不十分であると見なし、レンク (H. Lenk)¹⁰⁾の定義を援用し、ある特定の状況や行為に関与するものの状況把握、制度上の条件、社会的ルールのもとで成立するという条件を加えるに至る。ヘルマンは、レンクの行為は行動様式であり、特定の解釈や記述以外には必要としない、文脈や状況に相対的な、人や規範や期待に関係する記述である解釈の構成体であるとみなしている。さらにこのようなレンクの定義の改訂版としてタールベルク (I. Thalberg) の定義を導入する。タールベルクの定義は、身体的な動作と行為は同一のものとは見なさずに、行為は身体的動作を一つの構成素として含み、状況や制度的文脈、規範、規則、さらには関与者の動機や目的、期待なども含む特殊な解釈であるとされる¹¹⁾。

ヘルマンは、レンクとタールベルクの定義を導入し、行為を一種の解釈の構成体としたように思われる。これと似たような定義をデヴィッドソン (D. Davidson) も採用している。デヴィッドソンもヘルマンと同様に、行為を出来事として見なしている。しかし、行為が出来事であるためには特定の仕方で記述可能でなければならないとされる。この記述可能であるというのは、ある理

8) オースティンやストローソンの影響を受けて、言語行為の分類や間接言語行為、比喩などについて言語哲学的研究を展開

9) Herrman, Theo 1980: Sprachhandlungspläne als Konstrukte. In Handlungstheorien -interdisziplinäre Band 1. München: Wilhelm Fink Verlag S. 363-364

10) ベルリン生まれ。数学、哲学、社会学、スポーツ学などを学ぶ。

11) Herrman, Theo 1980: Sprachhandlungspläne als Konstrukte. In Handlungstheorien-interdisziplinäre Band 1. München: Wilhelm Fink Verlag. S. 364-366

由があって遂行された出来事であり、このため出来事が行為であることを明白にするような記述は、ある出来事と行為者がその出来事を遂行するための理由という二つを関係づけるための記述になっている必要があるという。デヴィッドソンがここで言う記述とは、行為というものが存在し、この存在する行為を様々に記述するということであった。そもそもデヴィッドソンの理論は、心、行為、言語の三者は全て一組の原則に従っていると考えられており、全体論的な立場で行為を定義づけようと試みているようにいわれている。

上記のヘルマンとデヴィッドソンの行為の定義は、それぞれの行為が行為として成り立つためには、解釈なり記述なりが必要であり、行為そのものの定義が行われているわけではない。そこで別の分野では行為の定義がどのようになされているのかを、行為論理学という枠内において、フォン・ウリクト (Georg Henrik von Wright) の理論を調べてみることにした。フォン・ウリクトは、「行為するということは何かという問いにあらゆる場合に適合するような答えはない。」¹²⁾という考えに基づいているが、「行為とは意図的に世界（自然）において変化を起こしたり、慎んだりすることである。」¹³⁾という行為のタイプの分類が行為が何かという問いに対する答えであると述べている。しかしそもそも行為論理学の枠内でのこのようなフォン・ウリクトの考えは、行為そのものを捉えるというよりもむしろ状態に変化を起こしたり、起こさせなかったりするための要因として見なしているものであり、行為自体を定義してはいたことが見いだされた。

これまでの調査においては、行為の直接的な定義が明確になることはなかった。もちろんこれまでは発話行為論、発語行為あるいは言語との関わりに範囲を狭めて調査を行ってきたという制限はある。しかしながらメググレ (Georg Meggle)¹⁴⁾は彼の編纂した“Analytische Handlungstheorie”において、行為の定義

12) von Wright, Georg Henrik 1977: Handlungslogik, in *Handlung, Norm und Intention*. Berlin: Walter de Gruyter. S.IX

13) 同上 S.XIII

14) 分析哲学者。ライプツヒヒ大学教授。

は広範囲な視点から行われなければならないとし、さらに概念分析、概念説明、定義を明確に区別して扱っていかなければならないとしている。行為理論の扱うべき概念としては、行為、行動、態度、生起、意志、希望、意図、動機、目標、好み、信頼、知識、能力、義務、許可、当為、責任、習慣、規則、などなど相当な広範囲に及ぶことを指摘している。¹⁵⁾このような状態では、行為の明確な定義づけを行うことはほとんど意味を持たないように思われる。

そこで、もう一度ヘルマンおよびデヴィットソンの定義に立ち返ってみると、この二人の行為自体の定義ではなく、解釈なり記述なりを媒介として行為を定義づけようとしていたということである。さらにデヴィットソンの場合には、行為、言語は一組の原則に従っている全体論を採り、ヘルマンは身体的動作を一つの構成素として含み、状況や制度的文脈、規範、規則、さらには関与者の動機や目的、期待なども含む特殊な解釈として行為をとられている。このような全体論的な原則に従い、制度的文脈から解釈するという点にヴィトゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein) ¹⁶⁾の「言語ゲーム」的な類似性を見て取ることはできないだろうかという新たな観点が浮かび上がってきた。

次にこの観点を検証すべく、簡単に言語ゲームについて概観して見たいと思う。

2. ヴィトゲンシュタインの言語ゲーム

ヴィトゲンシュタインおよび彼の思想に関しては、あまりに多くの書物が出版されているために、敢えてここで改めて詳細に述べる必要性はないと思うが、しかし彼の思想の中心をなす「言語ゲーム」を行為あるいは言語行為という関わりから見直してみたいと思う。

「言語ゲーム」という概念が明確な形で現れてくるのは後期ヴィトゲンシュ

15) Meggle, Georg 1985: Analytische Handlungstheorie Band1. Frankfurt am Main: Suhrkamp. S.VIII

16) オーストリアの哲学者。

ティンからであるといわれる。橋爪大三郎は『言語ゲームと社会理論』において、「ヴィトゲンシュタインの〈言語ゲーム〉のアイデアは、前期のいわゆる写像理論と対比し、いわばその「反転図形」だと理解するのが、いちばんわかりやすい。〈言語ゲーム〉は、前期の極端な言語思想が瓦解するなかで着想されたものである。」¹⁷⁾と述べている。前期ヴィトゲンシュタインは、『論理哲学論考』を、後期は『哲学探究』を中心とした時代であることは周知の通りである。『論理哲学論考』は、世界と言語、また思考と言語との関係について述べられており、言語と世界が一一対応をしているという写像理論¹⁸⁾や言語と言語の限界についての考えを述べているといわれる。世界は出来事の集まりであり、世界が思考に写像して文（命題）となる。命題には要素命題と複合命題があり、それぞれが思考を映し出している。命題の集まりとしての言語と出来事の集まりである世界は、一一対応しているという。ある命題が真だとすれば、その命題の意義である出来事が成立しているということを表す。この実際に成立している出来事の全体が現実の世界と一致する。また意義ある命題の全体が、語ることが出来るものを作り出し、それ以外のは語ることが出来ないものということになる。そしてこの語ることが出来ないものに関しては沈黙しなければならない。ヴィトゲンシュタインは「私の言語の限界が私の世界の限界を意味する」¹⁹⁾とか「思考しえぬことをわれわれは思考することはできない。それゆえ、思考しえぬことをわれわれは語ることもできない。」²⁰⁾と述べている。

このような『論理哲学論考』の思想は、これまでの哲学上の問題がこれによって全て解決されてしまうと思われるような画期的な考えであったといわれている。

これに対して『哲学探究』を中心とした後期ヴィトゲンシュタインでは、要素命題の存在を否定することによって、世界と言語の一一対応を自ら批判し、そこから新たな展開をすることになる。第一に、言語が世界と一般的に対応関

17) 橋爪大三郎『言語ゲームと社会理論』勁草書房 1985 S. 10

18) 語の意味はそれが指示する対象であると見なす考え方。

19) Wittgenstein, Ludwig 1984: Über Gewißheit. Frankfurt am Main: Suhrkamp

20) 同上。

係にないならば、個別に対応することができるかどうかという直示的定義²¹⁾の観点を試すことになる。しかしこの観点も、直示的定義によって新しいものに意味を与えることは不可能であり、直示的定義には、先行するなんらかの定義あるいはルールの存在が不可欠だという見解に至る。さらなる試みとしては、標本を基準として利用しようという言語のメートル法と呼ばれる考え方を検討するが、これとても個別の一つだけのものを例にして、意味を決定しようという点に無理があることが見いだされる。このような経過を経て、前期の中心的な考えであった世界と言語の写像理論は完全に放棄されることになる。

写像理論から離れたヴィトゲンシュタインは、言語の持つ意味というのは、言語外から与えられるものではなく、それを使用するメカニズムそのものによってもたらされると考えるようになり、そしてこれを文法と呼ぶようになる。この文法は、ある言語におけるいろいろな語の使い方を記述するものであり、これはあるゲームにおけるそのゲームのルール、規則に似ていると捉えるようになる。前期の写像理論に基づく言語観では、世界にどのような出来事が成立しているかを述べるようないわゆる陳述文以外の文、命令文や依頼文などを扱うことは困難である。陳述文の場合には、その文が述べる内容、出来事が存在するが、命令文にはそれが無い。命令文の意味を説明するためには、命令文における命令するという行為は、どのような役割をはたしているのかを説明しなければならない。このような意味概念は機能主義的意味概念と呼ばれる。後期ヴィトゲンシュタインの中心概念であり、最も有名な「言語ゲーム」というのは、このような意味概念の転換から導き出されたものと考えられている。この言語ゲームを説明する際に用いられるのが、石工と助手の会話²²⁾と自分の痛みを他者に伝達するとはどういうことかということである。ここでは後者を例に簡単に内容をまとめてみた。「わたしは歯が痛い」という発言は、私的な体験を他者に報告するのではない。「歯が痛い」という発言は、それが指し示す事

21) 指さしなどの具体的な身振りによる事象の指示。

22) 『哲学探究』§2にて導入される例。

態が存在しない。この種の発言は、真とも偽ともいえない。しかしわれわれは日常的に「歯が痛い」という体験をおのおのが持っている。このような体験は、言語に先立っている。それを言語という慣習的な制度に頼って「私は歯が痛い」と発言すると、それは他者に伝達されると思っているが、そうではない。このような体験、この場合には歯痛という私的体験が存在するわけではなく、私的体験を報告する言語ゲームがあるだけである。内面的なものも私的な主体も、実体としては存在していない。ただ言語ゲームが与える効果であり、言語ゲームは痛みのような振る舞いでできていて、われわれはそれに痛みを表象するだけである。言語ゲームとは、規則に従った、人々の振る舞いであると定義することができそうである。言葉がなぜ意味を持つのかという問いに対する答えは、前期においては世界とことばが一一対一対応しているという点に求められたのに対して、後期では人々が言語ゲームをしているからということになる。言語と世界の結びつきは言語ゲームの中に求められることになる。これはことばに限定されることではない。われわれの日常生活においても、われわれは様々な振る舞いをする。これもルール、規則に従っているものであり、このように考えてくると社会というのは言語ゲームの集まりとして捉えられるかもしれない。

歯痛を例にした私的体験の報告は、それ以外の発話や行為についても当てはまるものである。意図や命令、願望などは、言語によって生み出される私的な出来事である。このような考え方は、本論文の冒頭で述べたようなオースティンの「発話行為論」、特に事実陳述型、判決宣言型、権限行使型、行為拘束型、態度表明型、言明解説型というような言語の6つの用法²³⁾という考えへ発展していくことになる。橋爪は、「人間の行動はどのように記述できるだろうか。ただ、色々な人間の行為について、それらが互いに入り組んだ仕方であつて群がっている様子を描写することによってである。ある人が今為したことや、個々の行為ではなく、人間の行為の群れの全体が、すなわちわれわれが個々の行為をその下において捉える背景が、われわれの判断、概念、反応を決定するのである。」²⁴⁾

23) 『言語と行為』において導入された行為のタイプ。

24) 橋爪大三郎『言語ゲームと社会理論』勁草書房 1985 S. 58

というヴィトゲンシュタインの引用を用いて、言語ゲームをひたすら記述するように心がけていると述べている。また黒崎宏は『言語ゲーム一元論』において、「言語とそれが織り込まれる行為の全体をも「言語ゲーム」と呼ぶであろう」²⁵⁾と書いているように、行為を言語ゲームとの関わりにおいて扱うことは可能であるように思われる。

ヴィトゲンシュタインの言語ゲームにおいては、意味を考えるのではなく、どのように使われているかという使用をみることが重要であった。次に、この使用という観点に立って言語がどのように扱われうるのかを行為理論の意味論 (handlungstheoretische Semantik) という分野を扱うグローニング (Thomas Glonig)²⁶⁾の “Bedeutung, Gebrauch und sprachliche Handlung” を参考に概観してみたいと思う。

3. 言語行為と意味

グローニングは、行為理論の意味論という観点に立って、言語学的な意味記述の理論から導き出される結果や応用可能性を探ることを目的にしている。行為論の意味論の基本的な考えは、ある表現の意味を言語的行為におけるその使い方、個別言語における使用法として理解するところにある。基本概念としては、発話行為論や行為と関連する意図や習慣、規則、合理性原理などが中心に用いられている。この論文の構成は、使用記述や意味の使用理論の歴史的な紹介から始まり、行為理論の意味論のアプローチ、問題点と例示による分析という形になっている。特に意味の使用理論という観点から、ヴィトゲンシュタインの影響は歴史的にもかなり大きいとしてかなりの分量をさいて言及されている。

グローニングはまずは、話者の能力という点から始める。通常一人の話し手は、ある表現が象徴している対象のはっきりとした特性を指し示すことができ

25) 黒崎宏『言語ゲーム一元論』勁草書房 1997 S. 56

26) ギーセン大学教授。チュービンゲン大でドイツ語学、スポーツ学などを学ぶ。

る。またある言語的な表現を用いる場合、その表現の使い方によって何が確定されるのか、どのような言語的行為が成立するのかも示すことができる。このような能力により、何かを説明したり、確認したり、質問したり、さらには冗談やなぞなぞを理解したり、他の言語への翻訳や推論を行うことができる。しかし話者の能力には制限もあり、ドイツ語の場合であれば、心態詞のような表面上はあまり目立たない単語の使用などは意識されずに使用されていることが多い。このような話者の能力に関わるような観点は、一般的な意味理論には含まれていない。そこで、新たな意味理論として行為論的意味論が提案される。この理論の基本的な考えは、ある表現の意味を、言語的行為におけるその使い方、あるいはある言語における使用方法として理解することである。言語的表現の意味というのは、その表現が慣習的に使用可能かどうかという点に依存する。言語的表現の意味は、話者がどのように、あるいはなんのためにその表現を使うのかということを記述することで明確になる。そのため行為論的意味論の試みは、言語的表現とその意味を記述する際に、言語的表現が通常どのように使われて、言語的行為とどのように関連づけられるかによって特徴付けられることができる。そこで意味記述を行うために、どのような言語的行為がなされているかをはっきりさせる必要がある。しかしながら大抵の場合には、言語的行為や部分的な行為を示すだけでは、意味論的記述には不十分である場合が多い。このような場合に話者は、すでに知られている使用方法を前提として、実際に使われる表現との違いを明らかにしたり、会話のパートナーの知識を前提としたりすることになり、このような部分をカバーできるような意味理論が必要となるとされる。

このような意味の使用理論は、ヴァイトゲンシュタインに端を発しているとグローニングは述べている。言語的表現は、道具と比較される。道具というのは、ある特定の目的があり、その都度異なる目的に使うことができる。この比較は、言語的な表現が使われる際の合目的性と表現の種類は機能的に区別されるというヴァイトゲンシュタインの言語理論を明らかにしているとグローニングは述べている。言語ゲームを創案した時に用いた石工と助手の会話におけるごく単純

な「板」とか「梁」というような表現によって、話者は助手に対して命令をすることができる。「言語的表現の使用は、話者が表現を使用することによって、何か特定のものを意味し、聞き手がその表現の使用を理解することができるということの中に成立する」²⁷⁾という言語理論的な一連の規定との関連において、ヴィトゲンシュタインの基本思想である「ある表現の意味というのは、言語における表現の一般的な使用法である」²⁸⁾は成立すると述べられている。ヴィトゲンシュタイン自身は意味の使用理論という用語を用いてはいないが、言語ゲームにおいて用いられている方法は、言語の一般的な使用に基盤を置いているということができるのではないだろうか。また言語ゲームと行為という観点からいえば、言語的表現を意味することや理解することは行為ではない。しかしこの中には、欠けていたり、不十分な理解を補ってよりよいものにするための指示行為をいうようなものが含まれているとも考えられる。

グローニングは、上記のような行為論的意味論について、歴史的な背景や、言語的な表現の使用が可能となるためには、習慣や社会的制度などが必要であり、一般的な使用に際しては、使用の規則というものが必要であるとしている。一般的な使用というのは、この使用の規則として捉えられ、この規則によって、特定の言語的表現の発話がどのように意味したり、理解されたりできるかが決められる。さらに話者が、どのような目標を特定の発話で求めるのか、どのような目的が特定の発話を持つことができるのかが使用の規則によって明白になるとされる。そしてその使用規則は、ある特定の発話がその中に埋め込まれている行為との関連の中で現れてくるとも述べ、その表現手段の模索を行っている。しかし一般的な記述手段を提示するだけのものになっているように思われる。そこでこれまで触れてきたヴィトゲンシュタインの言語ゲームや行為論的意味論の考え方を参考にして、行為と意味を確定する方法の一つを最後に概略

27) Gloning, Thomas 1996: Bedeutung, Gebrauch und sprachliche Handlung. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

28) Gloning, Thomas 1996: Bedeutung, Gebrauch und sprachliche Handlung. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

してみたいと思う。

4. 意味確定のための理論と今後の展望

最後に取り上げたいのは、意味構築、認知領域間マッピングさらにメンタル・スペースという理論である。この理論は、フォコニエ (G. Fauconnier) が提唱したもので、フォコニエは、フランスで生まれ、その後カナダで過ごし、最初は数学を専攻していたが、言語学に転向、カルフォルニア大学で博士号を取得したという経歴を持つ。意味構築とは、人間が考え、行動し、コミュニケーションする際に、背景的認知・概念モデルや、その場で一次的に導入されるメンタル・スペースのような領域内部に適用される、高次で複雑な心的操作を指すとされている。フォコニエは、言語研究が、統語論、意味論、語用論といった分野に厳密に分けられ、言語表現の文法構造や意味構造をその談話構築機能と切り離したり、推論やコミュニケーションでの使用と切り離したりして研究しようとしていると現在の言語学研究に苦言を呈する。「実際には、談話構成は高度な組織と複雑性を持ち、より広い社会的、文化的文脈に埋め込まれている。〈中略〉時制、指示、前提、反事実表現の分析は、アナロジ・マッピング、概念結合、談話構築の分析と密接に関係しており、また、これらの分析はメタファ、メトニミ、物語構造、言語行為、修辞、一般的推論と切り離すことはできないのである。」²⁹⁾と述べている。この中で触れられているマッピングとは、文化的、語彙的に定着していき、言語と文化のカテゴリー構造を決めるものであり、自然言語の意味論や日常的推論のコアの部分でも中心的役割を果たしていることがわかってきた。さらに言語は、いくつかの重要な心的プロセスと密接に結びついており、言語表現が客観的な事態や状況を反映する時、その反映の仕方は、直接的ではなく、人間の認知構築や認知解釈を通じて行われるとされる。

29) G.フォコニエ (坂原茂他訳)『思考と言語におけるマッピング』岩波書店 2000

フォコニエは、著書『思考と言語におけるマッピング』において、彼の理論の背景や歴史的な経過、理論の詳細な説明を行っている。その中でも、マッピングの発展経過を述べている部分では、スウィーター（E. Sweetser）の領域間マッピングを紹介し、スウィーターが、内容、認識、言語行為という3つの領域が、力動性によって互いに関係づけられ、構造を与えられることを示したことが述べられている。この指摘から、この理論は単なる言語的な領域にとどまるものではなく、様々な要素が関連し合い、その中には言語行為として行為も関わっていることが読み取れるのではないだろうか。フォコニエは、最終的に「マッピングの機能がメンタル・スペースを作りだし、リンクさせることでありと説明している。メンタル・スペースは、思考、会話の進行につれて次々に増えていく部分構造でありそれにより談話構造、知識構造がきめ細かく分割できる。」³⁰⁾と述べている。また『メンタル・スペース』においては、「言語は単に世界、モデル、コンテクストや状況などと相対的に解釈されるだけではない。むしろ、言語は自分が作り出す構築物に関係づけられる。言語はメンタル・スペースやメンタル・スペース同士の関係、およびそれらの内部の要素の間に成立する関係を設定する。〈中略〉コミュニケーションは構築プロセスの一つの可能な帰結である。」³¹⁾とも言っている。

メンタル・スペース理論によって、古来言語に関して指摘されてきた多くの難問を解決することができるということをフォコニエは証明して見せているが、詳細に関しては今回は割愛することにする。しかし、このメンタル・スペースという考え方は、ヴィトゲンシュタインの言語ゲームと相通じる点が多く見られるように思う。意味というのは言語ゲームによって以外は決定することができない、つまり使用を通してしか決定できないものであり、この使用というのはコミュニケーションの過程の中で構築されるメンタル・スペースをもって表現することができるのではないだろうか。さらに言語の意味決定というのは、これを行為と置き換えて考えることもできるのではないだろうか。過去、

30) G.フォコニエ（坂原茂他訳）『思考と言語におけるマッピング』岩波書店 2000

31) 同上。

行為の定義を求めていくつかの試みをしてきたが、行為自体が明確に定義できるわけではなく、それは実践の場において、実際に行為が為されることによって決められてくるものであろう。

今回、長期研究休暇という貴重を時間を持つことができ、あらためて別の観点から行為ならびに行為と関わる関連領域を広く眺めることができる機会が得られたことは大変有益であったと思う。今後はこのメンタル・スペースを手がかりに、さらに行為ならびに言語行為という観点で研究を進めていきたいと思う。

参考文献

- D. デヴィッドソン (服部裕幸他訳) 『行為と出来事』 勁草書房 1990
 D. デヴィッドソン (野本和幸他訳) 『真理と解釈』 勁草書房 1991
 E. カウルバッハ (有福孝岳訳) 『行為の哲学』 勁草書房 1988
 G. フォコニエ (坂原茂他訳) 『思考と言語におけるマッピング』 岩波書店 2000
 G. フォコニエ (坂原茂他訳) 『メンタル・スペース』 白水社 1996
 D. ブルア (戸田山和久訳) 『ヴィトゲンシュタイン：知識の社会理論』 勁草書房 1998
 J. L. オースティン (坂本百大訳) 『言語と行為』 大修館書店 1978
 J. R. サール (坂本・土屋訳) 『言語行為』 勁草書房 1986
 J. R. サール (坂本百大監訳) 『志向性』 勁草書房 1986
 L. ヴィトゲンシュタイン (木村洋平訳) 『論理哲学論考』 社会評論社 2007
 S. エヴニン (宮島昭二訳) 『デイヴィッドソン』 勁草書房 1996
 飯田隆 『ヴィトゲンシュタイン』 講談社 2005
 金井満 「発話行為と行為」 『ドイツ学研究』 第 39 号 獨協大学 1998
 金井満 「行為論理学に見る行為概念と行為記述」 『ドイツ学研究』 第 45 号 獨協大学 2001
 金井満 「命題態度について」 『ドイツ学研究』 第 53 号 獨協大学 2005
 鬼界彰夫 『ヴィトゲンシュタインはこう考えた』 講談社 2003
 黒崎宏 『言語ゲーム一元論』 勁草書房 1997
 橋爪大三郎 『言語ゲームと社会理論』 勁草書房 1985
 橋爪大三郎 『はじめての言語ゲーム』 講談社 2009
 森本浩一 『デイヴィッドソン』 N H K 出版 2004
 Brennenstuhl, Waltraud 1980: Ziele der Handlungslogik. In: Handlungstheorien – interdisziplinäre Band 1. München: Wilhelm Fink Verlag.
 Davidson, Donald 1980: Actions & Events. Oxford: Clarendon Press.
 Gloning, Thomas 1996: Bedeutung, Gebrauch und sprachliche Handlung. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
 Herrman, Theo 1980: Sprachhandlungspläne als Konstrukte. In: Handlungstheorien-interdisziplinäre Band 1. München: Wilhelm Fink Verlag

- Hindelang, Götz 1994: Einführung in die Sprechakttheorie. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Kaulbach, Friedrich 1982: Einführung in die Philosophie des Handelns. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Meggle, Georg 1985: Analytische Handlungstheorie Band1. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Searle, John R 1992: Sprechakte. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Searle, John R 1991: Intentionalität. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Wittgenstein, Ludwig 1984: Tractatus logico-philosophicus. Frankfurt am Main: Suhrkamp
- Wittgenstein, Ludwig 1984: Das Blaue Buch. Frankfurt am Main: Suhrkamp
- Wittgenstein, Ludwig 1984: Über Gewißheit. Frankfurt am Main: Suhrkamp
- Wunderlich, Dieter 1976: Studien zur Sprechakttheorie. Frankfurt: Suhrkamp.
- von Kutschera, Franz 1980: Grundbegriffe der Handlungslogik. In: Handlungstheorien - interdisziplinäre Band 1. München: Wilhelm Fink Verlag.
- von Wright, Georg Henrik 1977: Handlungslogik. Ein Entwurf. In Handlung, Norm und Intention. Berlin: Walter de Gruyter.
- von Wright, Georg Henrik 1977: Handlungslogik. In: Handlung, Norm und Intention. Berlin: Walter de Gruyter.
- Wunderlich, Dieter 1980: Aspekte einer Theorie der Sprechhandlungen. In: Handlungstheorien - interdisziplinäre Band 1. München: Wilhelm Fink Verlag.

Über Bedeutung, Handlung und Sprachspiel

Mitsuru KANAI

In einem früheren Aufsatz, der in Dokkyo Universität Germanistische Forschungsbeiträge Nr. 39 veröffentlicht wurde, habe ich versucht, Handlung mit Beziehung auf die Sprechakttheorie zu untersuchen. Es scheint mir, dass J. L. Austin, der die Sprechakttheorie aufgestellt hat, in seinem Hauptwerk „How to Do Things with Words“ nicht genau definiert, was Handlung eigentlich ist. Der Begriff oder die Definition bleibt noch ungeklärt. In zwei weiteren Aufsätzen in Dokkyo Universität Germanistische Forschungsbeiträge Nr. 45 und Nr. 53 habe ich mich mit demselben Thema mit Hilfe der Handlungslogik und der propositionalen Einstellungen von Sprechern beschäftigt. Auch dabei blieb der Begriff „Handlung“ schließlich ungeklärt. Dabei hat sich aber gezeigt, dass Handlung im Zusammenhang mit dem Kontext analysiert werden muss.

Aus diesem Grund wollte ich während meines Forschungsurlaubs im Jahr 2009 den Begriffen „Sprechhandlung“ bzw. „Sprachhandlung und Handlung“ von einem anderen Standpunkt aus näher kommen. Nach meinen früheren Untersuchungen könnte eine Handlung sowohl Situationen als auch institutionelle Kontexte, Normen einschließen. Wenn eine Handlung tatsächlich beide einschließen würde, könnte es heißen, dass eine Handlung durch Gebrauch definiert werden kann. Daher untersuche ich die Gebrauchstheorie im Rahmen der sprachlichen Handlung. Dabei komme ich auf die Idee, und nehme an, dass dieser Gedanke im Zusammenhang mit dem wittgensteinischen „Sprachspiel“ steht. Darüber hinaus versuche ich, das „Sprachspiel“ mit der „Mental-Space theory“ von G. Fauconier zu kombinieren.